

「神のものは神に」

—マタイによる福音書講解説教 90—

詩篇

第139篇 13節～18節

マタイによる福音書

第22章 15節～22節

説教

岡村 恒 牧師

「それでは、…神のものは神に返しなさい。」(21節)主イエスの言葉は、今朝もこの聖堂に響いています。『あなたは神のものだ』と主イエスが宣言して下さいます。カイザルの肖像が刻まれた貨幣を目の前にしながら、主イエスは、私たちに《神のものである徴》が刻まれていることをご覧になるのです。

主イエスはたとえ話を重ねて、神の国について、神ご自身についてお語りになりました。ぶどう園のたとえ話では、農夫たちを信頼し、ただの使いだけではなく、自分の息子まで遣わして収穫の喜びを共に味わおうとする主人を、また、王子のために婚宴の場を用意した王のたとえ話では、ふさわしくない者までを招き、その祝いに相應しい衣まで用意して下さる王の姿を描き出されました。

神を信じていると言いながら、神の招きに応えず、自分の畑や商売を優先して生きる律法学者や祭司長たちは憤慨して、主イエスを罠にかけようとしてきました。ローマ帝国の支配を認め、神をないがしろにするか、あるいは律法を第一にしてローマへの反逆者として訴えるか、いずれにしても主イエスを陥れることができる罠を用意しました。しかも、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたであって…」(16節)と、偽物の信仰告白さえ口にします。

自分の決断を優先して、自分の人生を自分のものとして支配しようとする時、偽物の信仰を口にしてまで神を排除しようとする。そういう私たちの不信仰な姿を、このたとえ話は明らかにします。

主イエスは、神に逆らう私たちの弱さをよくご存じでした。そして、納めるべき貨幣を持ってこさせました。そこには目に見える徴がありました。言葉だけではなくて、目で見て、手で触れることができるものを用意させたのです。鑄造された硬貨には、カイザルの肖像が浮かび上がっていました。カイザルの権力が支配している場所で、この硬貨は通用しました。この肖像に描かれた人物の力が、今、この瞬間、この私に及び、支配している。そういう現実を目の当たりにする場面です。

主イエスは、「カイザルのものはカイザルに」返して生きたら良いと言われました。そして同時に、私たちがいったい誰のものかをお尋ねになりました。「神のものは神に返しなさい」と主

が言われた時、主は、私たちが確かに神のものであると、宣言されたのです。

クリスマスに響いた神の約束は《インマヌエル》(=神、我らと共にいます)でした。神のひとり子がこの地上においでになり、私たちの人生のただ中に突入して来て、いつも、いつまでも共にいて下さることがはっきりと示されました。私たちが神のものとして取り戻すために、神のひとり子が地上に遣わされたのです。

主イエスは、私たちをご覧になって、私たちに、神のものである徴をご覧になります。洗礼を授けられる時、人は新しく造り変えられて、神の子とされます。洗礼は、「目に見える、消されざる罪の赦しの徴(しるし)」と呼ばれます。洗礼において、私たちには、神のものである徴が確かに刻まれるのです。

神のものではなく、神の羊の群れに入る資格のない私たちが、清く傷のない羊と呼ばれて、神の羊に数えられる。これは、あり得ないことです。ただ、主イエス・キリストが十字架に架かって、その命を与え尽くして下さったので、私たちは《神のもの》にされました。「神のものを神に」と言われる時、「神のもの」の中に、私たちが含まれるようになりました。

聖餐の食卓を囲むたびに、「ふさわしくない者が、ただキリストの義をまとうことによってこの食卓に与(あずか)ることができる恵みを感謝しつつ、信仰と真実とをもってこの食卓に与りましょう。」と繰り返し耳にします。神のものでなかった者が、信仰を与えられ、洗礼によって清められ、神の子とまでされる。これが聖書が語る福音です。

神のものでされた者は、神以外のものに支配されることはありません。洗礼を受けた者は、生きていても死の眠りについても、身も魂も、自分のものではなく神のものです(ハイデルベルク信仰問答 問1)。私たちは神のものですから、ただ神の力のもとで生きるのです。

御子の血をもって、私たちが罪と死の滅びから買い戻して下さった神が、あなたは私のものだ、と宣言して下さいます。私たちが、神のものとして清め、祝福して、歩ませて下さいます。主の食卓を囲むたびに、変わることはない神の救いを、私たちは味わい続けて歩みます。

(記 岡村 恒)